

# 埋蔵文化財 愛知

No.10



## ちょうだ 町田遺跡の水田跡

春日井市町田町所在の町田遺跡において、東西、南北方向に走る畦畔に区画された鎌倉、室町期の条里制遺構を検出した。写真は東西畦畔を中心に、それに直交する南北畦畔を北西方向より写したものである。（6ページに関連記事記載）

## シリーズ 古墳の時代

## モトヤシキ土器群の成立

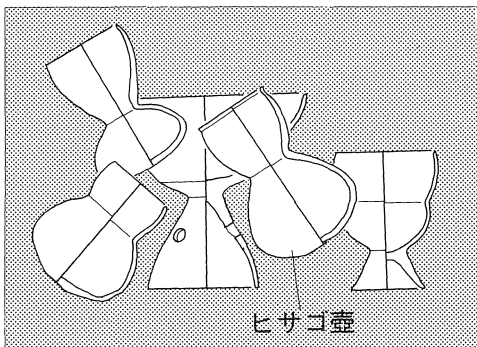
濃尾平野という大湿原を舞台にした焼物の歴史の中には、時に異様なカタチを誕生させる場合が見られる。それはたえず繰り返される東西文化の接点という地の利と、人々の往来を促す大河川が存在がそこにある。

弥生時代末期、当地に誕生した一群の土器はいちはやく濃尾平野全体に一つの時代の流行をかたちづくってゆく、そしてそればかりか特に東日本に広く、この土器群が広がってゆくのであり、東日本全体に過大な影響をあたえることになる。古墳時代への移行は、まさにこれら一群の土器の動向の中にその謎が潜んでいるといってもよい。この不可思議な一群の土器たちを我々は「モトヤシキ」と呼ぶ。

以下その特色を見てみることにしよう。

## 形態の内彎志向

壺・高杯を見てみると、例えば口縁部の状況では弥生時代末期になると、それまで多くは外方へ大きく外反していたものが、一変して内側に彎曲する形状に変化する。また高杯の脚部においても同様な変化を見ることができる。この内彎への一定の動きを形態の内彎志向と呼ぶと、モトヤシキ土器群には、壺・高杯・器台等々多くの器種にこの傾向が見受けられ、それが独特の気風をかたちづくっているといえる。他地域あるいはそれまでの土器が外反志向とすれば、まったく逆の発想といえる。この丸く、ゆるやかなカタチこそ弥生土器の終焉を決定づけた。

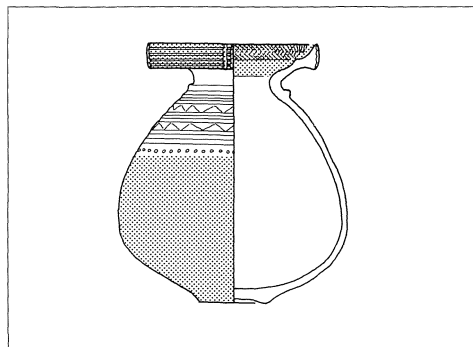


## 「S字甕」と薄さへの挑戦

モトヤシキ土器群の中できわめて特色のある煮沸具が存在する。S字状口縁台付甕と呼ばれる甕である。この台付甕の特色は第一に器壁の薄さにあり、そのあまりの薄さゆえに復元作業は大変困難である。他地域あるいはそれまでの甕が薄さを表現するのになかば強引に器壁をケズる方向、あるいは型で仕上げるのに比べ、S字甕はむしろケズリ技法をすてさり通常の製作手順の中で薄さを追求した感がある。それは一つの技法の到達点を見る。当地で発明されたこのS字甕は、主に東日本全体に広く拡散し、時にその地の主要な煮沸具として定着するという不思議な動きさえ見られる。

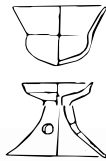
## 「パレススタイル」と呼称される壺

口縁部に凹線文、体部上半に文様帯そして赤彩を施した壺をパレス壺という。弥生時代中期にその初形が見られるが、モトヤシキ段階になると文様、形状に定型化したものが見られるようになる。するとそのカタチは何故かS字甕同様に各地に出没し始めるのである。S字甕とパレス壺、この特色的な形の拡がりは一つの新しい時代の開始を予見する動きとして、多くの研究者が注目しているのであるが、今だその謎は完全には解明されていない。胎土において良選された白色系統の素地を最高とし、その白色の器壁に赤彩を施すその美しい文様とカタチはまさに豪華華麗な特殊な土器といってよい。



小型の土器

モトヤシキ段階になると小型の器台が新しく登場してくる。弥生時代から続く大型の器台を相似的に小型化したのみの形状ではあるが、小型品の出現は注目してよい。その後小型の土器は器台・高杯・壺・鉢と次々に誕生してくる。これらの小型の土器群はまつりにかかわる道具として重要な意味をもつと考えられている。それにしてもモトヤシキ前半の小型の器台ははたして何をその上に乗せたものであろうか。



モトヤシキの時代

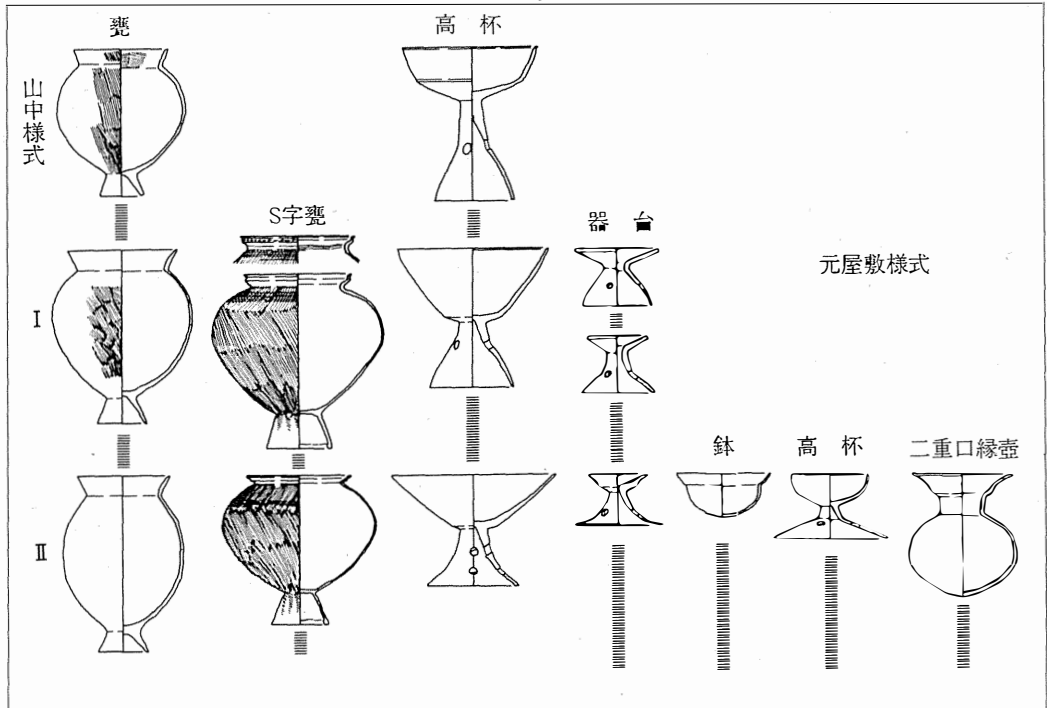
モトヤシキ土器群の特色は以上のように、形態の内彎志向というカタチの気風を基調とし、器壁の薄さを追究、器種としてはS字甕と小型の器台の登場を見る。この一群の土器は大きく2つに区別できる。すなわち内彎志向を持つ前半と、それが崩れ、畿内系の土器群が参入してくる後半である。後半になると小型の土器群が

一気に増加し、まったく形態の異なる土器（畿内系の土器群）が突如出現する。そしてやがてパレス壺を初めとする特色ある土器群がほとんど消滅し、まったく新しい土器群の成立を見る。ここにモトヤシキ土器群の完全な崩壊が見られるのであり、それはおそらく5世紀前半の時代と考えられる。モトヤシキの時代とはすなわち、弥生時代末期～古墳時代前期という時代の過渡期にあたるのであり、おおよそ後半において尾張に前方後円墳の造営が見られるものとする。

古墳の時代へは、モトヤシキ土器群の崩壊の過程で生み出されてくる動きといえよう。

ここでいう元屋敷（モトヤシキ）土器群は従来の欠山式土器後半を含めて呼んでいる。  
掲載した土器とその考え方は第3回東海埋蔵文化財研究会の資料を参考にした。  
『欠山式土器とその前後』、『欠山式土器とその前後研究報告編』第3回東海埋蔵文化財研究会 1986

(赤塚次郎)



土器の消長

市町村だより

## 麻生田大橋遺跡

豊川市教育委員会

麻生田大橋遺跡は、東名豊川インターチェンジの南約500mの豊川市麻生田町大橋に所在する縄文時代晩期を中心とした遺跡である。遺跡は、豊川右岸の低位段丘に立地し、遺跡東側の沖積地との比高差は2.5mを測る。また、市道を挟んだ本遺跡の北側には、縄文時代中期後葉から晩期後葉にかけての麻生田当貝津遺跡が存在しており、麻生田大橋遺跡と合わせて麻生田遺跡と総称されている。

豊川市教育委員会では、豊川東部区画整理事業に伴う事前調査として、昭和52年より、この麻生田大橋遺跡の発掘調査を実施しており、今年度までに過去11回にわたる調査を行ってきた。これにより、ほぼ遺跡全体の3割にあたる3,400㎡の調査が完了したわけであるが、今回の第11次調査までに出土した土器棺数は89基にのぼり、東海地方でも屈指の縄文晩期の遺跡であることが判明している。

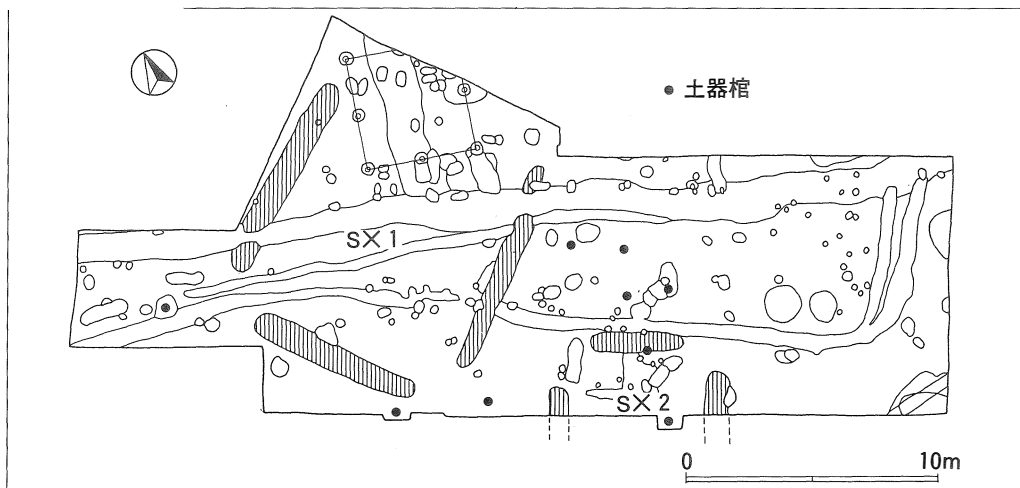
検出された土器棺は、縄文晩期後葉の五貫森期から水神平期にかけてのものがほとんどで、遺跡全域から隈無く出土をみている。本遺跡では、住居跡等の生活址が未検出であり、居住域が別遺跡に存在する可能性を指摘できるが、土器棺の出土する遺物包含層からは、未製品を含んだ多量の打

製石斧や磨製石斧を出土しており、単なる墓域としてでは理解できない側面を有している。今後、隣接地域の調査の徹底が望まれよう。

なお、第11次調査では、市内では初めての発見である方形周溝墓が2基検出されており、本遺跡の墓制の消長を考える上での貴重な資料が提供されている。発見された2基の周溝墓は主軸を異にし、隣接して検出された。両者とも主体部、マウンド等は未検出である。形態は四隅陸橋を基本とし、SX1は「コ」の字形を呈する。時期については、SX2は、出土した無文の細頸壺から弥生中期後半期のもものと推定されるが、SX1では明確な伴出遺物が確認されおらず、時期比定は今後の遺物整理のなかでの検討課題とされる。いずれにせよ、本遺跡では、弥生中期初頭から中葉にかけての遺構、建物が寡少ではあるが確認されており、これに今回の弥生中期後半期の方形周溝墓を加え、遺跡が弥生中期に至っても墓域として存続することが明らかになった。

この他、本遺跡では、古代から中世・近世にわたる溝状遺構、土壇(墓)、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡等の各種遺構が検出されており、調査面積の増加につれ、各期の様相が徐々に判明してきている。特に中世の遺構、遺物は、量・質ともに豊富であり、今後の遺物整理作業が期待される。

(社会教育課主事 前田清彦)



麻生田大橋遺跡第11次調査全体図

---



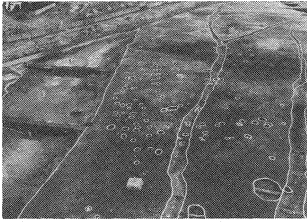
---

## 発 掘 ニ ュ ー ス

---



---

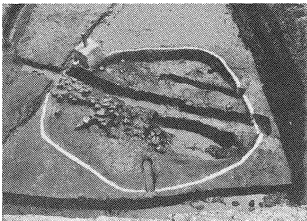


### 勝川遺跡 (F・G・H・I区)

春日井市

弥生時代中期末の掘立柱建物群と、木器未製品が多数出土した大型土坑からなる木製品加工に関わる作業空間を検出した。

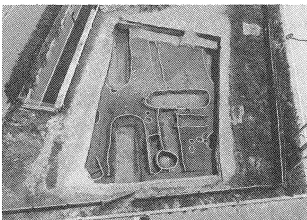
調査区中央を東西に流れる旧河道北肩より、4～10世紀の多量の木製品が出土し、その中には8・10世紀の人形(ひとがた)・舟形・斎串(ゆぐし)等の祭祀具が含まれる。



### 比良遺跡 (A・B・C区)

名古屋市

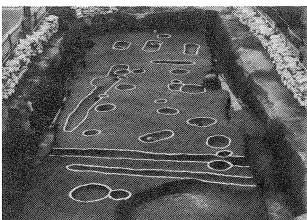
比良遺跡3区の中では、B区において弥生時代前期の単純層を確認。土坑10基、土器溜りなどを検出する。さらにシルトの間層を挟んで古墳時代前期の包含層と、溝、柱穴、土坑を検出した。遺物としては、遠賀川系の壺・甕など多数。元屋敷式期(古墳時代前期)以降の高杯・台付甕などが出土。



### 朝日遺跡 (A～L区)

名古屋市

62年度の調査は、東墓域に沿ったかたちでA～L区までの12区が設定され、墓域が水場川の東約250mのE区にまで広がることが確認された。F～J区では弥生時代末～古墳時代前期にかけての井戸状遺構3基・溝・土坑が散発的にみられるのみとなり、K区より東は遺構は無く、なだらかな自然の落ち込みとなる。



### 清洲城下町遺跡(新川・清洲線道路拡幅関連)

(J・K・L区) 清洲町

調査区は城下町の外堀の内側に位置し、16世紀末～17世紀初めにかけての土坑や溝などを検出。J区では更に下層から平安時代後期の掘立柱建物跡を二時期にわたって検出し、「沙中房」と墨書された灰釉皿が出土。また平安時代前期の住居跡4軒と溝を検出。



### 諏訪遺跡

新城市

新城市151号線バイパス建設にともなう発掘調査で、遺跡は豊川流域中位段丘上に立地し、主な遺構は現在までのところ、弥生時代の方形周溝墓2、土坑、奈良時代から平安時代前半の住居跡20、掘立柱建物3、時期不明の大型土坑7などが検出されている。

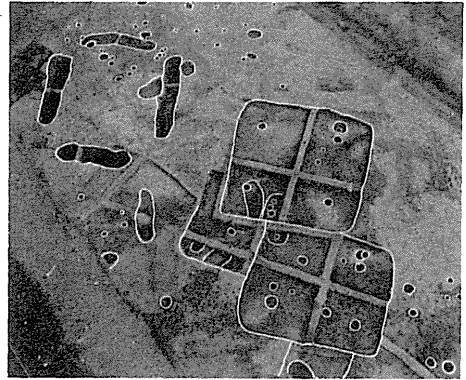
遺跡紹介

町田遺跡

町田遺跡は、春日井市勝川町の南東、地蔵川左岸の沖積地に所在する遺跡である。発掘調査は昭和62年4月より実施され、現在、調査区北半の調査を終了したところである。基本的には、地蔵川の氾濫原の湿地帯に属するが、調査区西端および調査区中央部は礫層を混じえた微高地が存在し、1m前後の起伏をもった地形をなす。調査の結果、次の2時期に大別できた。

湿地に挟まれた微高地上に、弥生時代終末～古墳時代初頭にかけての集落が営まれる時期。竪穴住居跡11軒、方形周溝墓3基等を検出した。比較的短期間に営まれた小規模な集落と考えられる。

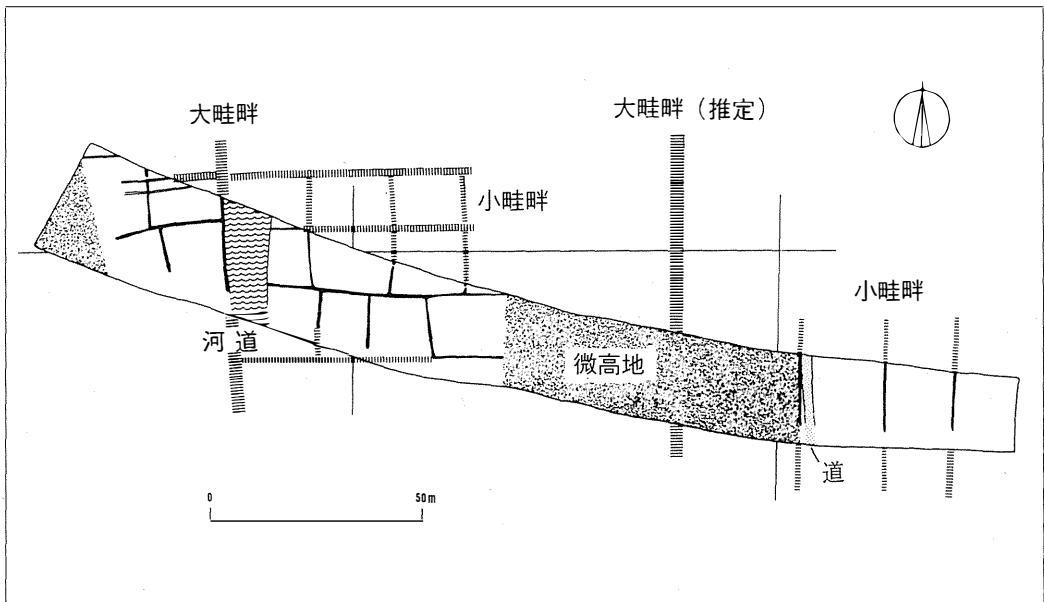
湿地に、平安時代～鎌倉、室町時代にかけての条里制水田が営まれる時期。軸線をほぼ真北方向に向けた大畦畔と、それに平行または直交する小畦畔により区画された中世の水田を18枚検出した。調査区西半では、東西畦畔15m、南北畦畔11mと長軸方位を東西方向にとるが、東半では長軸方位を南北方向にとる畦畔が約18m



間隔で並ぶ。他に、大畦畔の東の沿って地蔵川支流の河道、微高地の東に沿って走る「道」を検出した。畦畔、およびこれらの遺構は、戦前の地籍図でも確認でき、綿々と昭和の現代まで受け継がれていったことがうかがい知れる。

また、当遺跡は、条里制遺構の残存する松河戸遺跡の北西にあたり、条里制の開始時期も調査の目的の一つとなった。中世の大畦畔およびそれに直交する東西畦畔の下層で、平安時代にさかのぼる畦畔を確認した。平安以前の畦畔の有無を含め、今後、南半の調査でより詳細に検討していく必要がある。

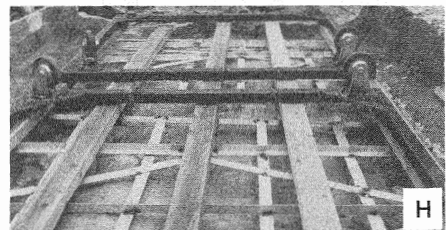
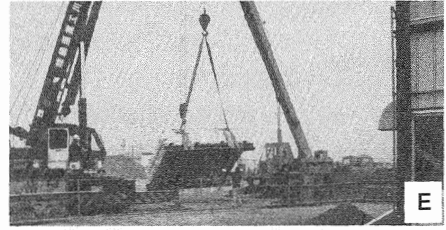
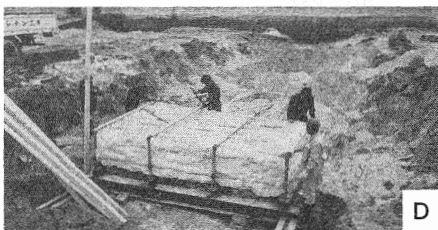
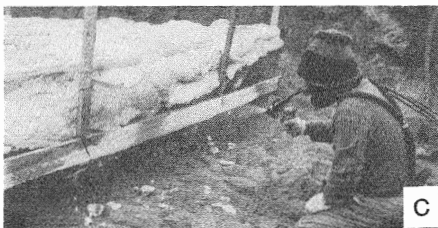
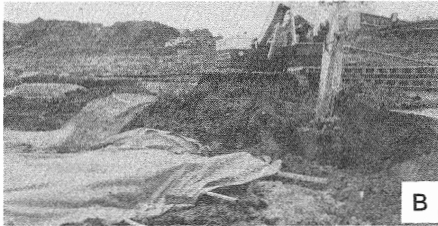
(後藤浩一)



町田遺跡遺構配置図 (鎌倉、室町期)

保存処理レポート (2)

朝日遺跡における『やな』遺構取り上げ



本誌No. 6で住居跡断面の転写・埋葬人骨の取り上げについて報告したが、今回は昭和62年3月に行った朝日遺跡61E区出土の築(やな)、簀(す)遺構の取り上げ工程について紹介する。

(A～Fは写真番号)

- 1 遺構面の清掃・保護(不織布で覆う) A
- 2 上面を木枠で囲い発泡ウレタンを充填
- 3 周囲を掘り下げ、遺構を台状に残す B
- 4 周囲を木枠で囲い発泡ウレタンを充填 C
- 5 底部に鉄板を打ち込み土を分離させる
- 6 鉄パイプで補強し発泡ウレタンを充填 D
- 7 大型クレーンで吊り下げ、移動、反転 E
- 8 遺構裏面の調査、図、写真をとる F

- 9 裏面に土入れし、旧状に戻す
- 10 裏面保護(樹脂・ガラス布で裏打ち) G
- 11 裏面を、鉄・ステンレス・木材で補強 H
- 12 裏面に発泡ウレタンを充填
- 13 大型クレーンで吊り下げ、反転
- 14 発泡ウレタン・補強材を取り除く
- 15 保存処理(PEG含浸)

8は本センターで行ったが、他は専門業者に依頼した。7までで4日間、9から13までは2日間、15は1年間に要する。このほかに足場確保、重機進入路の造成など数日を加える。

(山田耕治)

## 清洲城下町下層遺跡出土の 墨書陶器

県道新川清洲線の道路拡幅工事に伴う発掘調査により墨書陶器が十数点出土した。

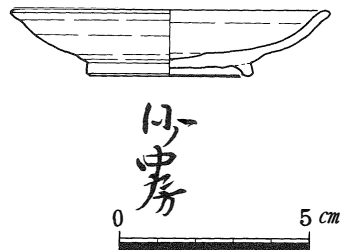
墨書はいずれも平安時代後期の灰釉陶器（皿がほとんど）の底面に記されていた。その中でも5点、「沙中房」と判読できる墨書が発見されたことは注目に値する。文字は細く書かれたものと太く書かれたものの二種類に分けられる。皿の口径は8.5cm前後といずれも小ぶりである。篠岡窯の製品と思われ、つけがけによる釉があり、つくりの雑な低い高台である。

「沙中房」の墨書陶器のうち2点は、面的な広がりをもつ土器群（平安時代後期）から出土した。この直下からは周囲に幅50cm程の溝をも

つ建物跡（三間×二間以上）が発見され、土器群、特に「沙中房」の墨書陶器と何らかの関連がみとめられる。

今回発見された遺構・遺物は、清洲城下町遺跡とは性格の異なるものであるため便宜的に『清洲城下町下層遺跡』とした。

（中野良法）



## センター日誌

### 人事異動

退職 7月31日 佐伯二郎（嘱託）  
神戸市職員へ

採用 10月1日 岡本直久（嘱託）

### 来訪者

- 4・10 名古屋土木事務所長他5名。
- 5・7 名古屋市文化財課長他2名。
- ・8 名古屋市立浮野小学校77名。
- 〃 朝日カルチャーセンター40名。
- ・16 愛知県陶磁資料館学芸課長他15名。
- ・21 清洲町立清洲東小学校教職員20名。
- ・28 日進町文化財講座35名。
- 6・2 県立一宮聾学校26名。
- ・25 名古屋市立浮野小学校職員20名。
- ・30 県立一宮高校社会科教員7名。
- 7・8 安城市教育長 木村政夫氏他1名。
- ・17 名古屋市立比良西小学校70名。
- ・23 稲沢市文化財愛護少年団40名。
- ・30 稲沢市文化財愛護少年団40名。
- ・31 県立江南高校職員7名。
- 8・4 名古屋市飯田ハイツ子供会20名。
- 〃 東邦大学附属高校考古学研究会22名。
- 〃 稲沢市文化財愛護少年団40名。

8・12 県立春日井南高校職員14名。

### 現地説明会

- 6・13 朝日遺跡C・D・E区 参加者 約250名。
- 7・11 町田遺跡A・C・E・G区 参加者 約250名。
- 9・12 勝川遺跡F・G・H・I区 参加者 約350名。

### 記録

- 8・15～27 豊田市棒の手会館において、埋蔵文化財展を開催。参観者は1,499名。  
期間中の8月23日に埋蔵文化財講演会を開催。講師は信州大学教授 大参義一氏 演題「先史時代の愛知」参加者122名。
- 9・8～9 市町村職員発掘調査技術等研修会〈基礎研修会〉を開催。参加者33名。

## 埋蔵文化財愛知 No.10

発行 昭和62年10月  
編集 財愛知埋蔵文化財センター  
〒450 名古屋市中村区名駅二丁目44番5号  
名駅パークビル9F  
TEL 052-586-3155  
印刷 東海プリント社